



(パネリスト紹介)私を取り巻くダイバーシティ

著者名	山室 桃
雑誌名	東京女子医科大学女性医師・研究者支援センター女性医師支援シンポジウム抄録集
巻	平成25年度
ページ	13-14
発行年	2013-05-25
URL	http://doi.org/10.20780/00031948

パネリスト紹介

山室 桃（やまむろ・もも）

日本放送協会（NHK）

報道局科学文化部・記者

略歴

- 1995 年 08 月 高校卒業後、ジャーナリズムを学ぶため渡米
カリフォルニア州サンフランシスコの語学学校に入学
- 1996 年 09 月 ミズーリ州・私立アビラ大学マスメディア学部新聞学科に入学
- 1999 年 09 月 テレビメディアを学ぶため、カンザス大学に転入
- 2002 年 05 月 カンザス大学ジャーナリズム学部テレビニュース学科 卒業
※在学時より働いていたカンザス州のケーブルテレビ局、K J H K の記者として
事件取材やネイティブアメリカン問題などを中心に取材活動に取り組む
- 2005 年 04 月 米国より帰国～番組制作会社「アマゾン」入社（東京・渋谷区）
※ディレクターとして文学、科学、バラエティー番組まで様々な番組制作に携わる
- 2007 年 11 月 NHK 入局（中途採用） 記者として熊本放送局 配属
※水俣病などの環境問題、「赤ちゃんポスト」などを中心に取材活動に取り組む
- 2010 年 07 月 NHK（東京本局）報道局 科学文化部 医療担当記者 配属
※産婦人科、小児科、精神科の分野を中心に取材活動に取り組む
※2011 年 7 月より産休、同年 9 月第一子出産、1 年の育休を経て 2012 年 9 月復職

私を取り巻くダイバーシティ

アメリカで過ごした 10 年間、個人の多様性を認め受け入れるという「ダイバーシティ」の考え方そのものを、日常生活のなかで身近に感じてきた。異なる背景や文化、宗教を持つ人々の多様な価値観や個性を理解し、互いに刺激し合うことで想像力や知識を生み出し、それらがみずからの成長や人生観に大きな影響を与えたといっても過言ではない。アメリカでは 60 年代以降、女性やマイノリティの社会進出が急速に進んだ。個人の「差」を受け入れ、多様な人材を受け入れようという意識が企業や組織で経営課題として重要視されてきた一方で、これまで優遇されてきた人材が逆差別を感じ、過激な行動に出るということも少なからず起きているのが現状だ。ダイバーシティの先進国とも言えるアメリカにおいてもなお、人種差別の問題は根深く、私自身も滞米中、現地の大学や職場において数え切れないほど痛感した。

個人主義が浸透するアメリカに比べ、同質性の高い日本の社会において、自分とは異なる他人を受け入れ理解することは並大抵のことではない。しかし、世界各国、特にアジアの国々の国際競争力が急速に伸びるなか、これまで通り画一的な組織のあり方では、到底勝ち目はない。単に多様な人材を雇用し、福利厚生を充実させるだけではダイバーシティは前進しない。日本の企業は、これまでの学歴主義や性別、人種にとらわれることなく、社員が持っている能力をフルに発

揮できる環境づくりを推し進め、社員1人1人を本当の意味で「活用」していく必要がある。世界に通用する人材を育てるためにも、こうした企業の努力がいま、問われている。

NHKにおいては、日本企業で一般的は「新卒採用」のみならず、10年ほど前より「中途採用」を重視する傾向にある。特に、記者やディレクターなどニュースや番組制作に直接、携わる職種について、多様な人材を雇用し、番組づくりに活かそうと積極的に他業種からの採用を行っている。一方で、入局から定年退職までの間、4、5年、長ければ10年程度の周期で「全国転勤」することから、妊娠・出産を機に退職する女性が、どの職種においても年々増加傾向にある。こうした問題への打開策のひとつとして、試験的に在宅ワーク職員を募集するなどといった取り組みも始まっている。公共放送としてより良い放送につなげるためにも、様々な背景を持つ人材を受け入れ、働く環境をサポートする仕組みがさらに求められている。